

2024.8.12(月・祝)14:00開演 東京オペラシティ コンサートホール
Mon. / Holiday Aug. 12, 2024, 14:00 at Tokyo Opera City Concert Hall

〈山の思い出〉〈Mountain Memories〉

指揮とお話 横山 奏 Kanade Yokoyama, conductor & speaker

ヴァイオリン 辻 彩奈* Ayana Tsuji, violin

ゲスト 石丸謙二郎 Kenjiro Ishimaru, guest

コンサートマスター 近藤 薫 Kaoru Kondo, concertmaster

グリーグ：劇付随音楽『パール・ギュント』より
「朝」「山の魔王の宮殿にて」(約9分)

Grieg: Morning Mood and In the Hall of the Mountain King from "Peer Gynt" (ca. 9 min)

ヴィヴァルディ：『四季』より「夏」* (約10分)

Vivaldi: Summer from The Four Seasons (ca. 10 min)

モンティ：チャールダーシュ* (約5分)

Monti: Csárdás (ca. 5 min)

— 休憩 intermission —

R. ロジャース(R. ベネット編)：

サウンド・オブ・ミュージック・セレクション (約12分)

R. Rodgers (arr. by R. Benett): Selections from The Sound of Music (ca. 12 min)

ムソルグスキー：交響詩『はげ山の一夜』(約12分)

Mussorgsky: Symphonic poem "Night on Bald Mountain" (ca. 12 min)

J. シュトラウスⅡ：ワルツ『ウィーンの森の物語』(約12分)

J. Strauss II: Waltz "Tales from the Vienna Woods" (ca. 12 min)

主催：公益財団法人 東京フィルハーモニー交響楽団 / Presented by Tokyo Philharmonic Orchestra

助成：文化庁文化芸術振興費補助金(舞台芸術等総合支援事業(公演創造活動)) | 独立行政法人日本芸術文化振興会
Subsidized by the Agency for Cultural Affairs Government of Japan | Japan Arts Council

◎すべてのお客様に、快適にお楽しみいただくために ♪本公演は全席指定です。指定のお席にご着席ください。演奏開始間際の入場の際にはスタッフの案内で入場券記載とは異なる席への着席をお願いすることがございます。♪演奏中のご入場は、固くお断りいたします。楽章間のご入場は楽曲の進行によりスタッフがご案内いたします。入場いただけない場合もございますのでご了承ください。♪曲間・楽章間での退場につきましては、体調に不安がある場合など、無理せずご判断ください。その際、周りのお客様の鑑賞の妨げとならぬよう、ご配慮いただければ幸いです。♪演奏中に、時計やスマートフォンのアラーム音等が鳴らないよう、いま一度ご確認ください。♪演奏は最後の余韻まで余さずお楽しみください。早すぎる拍手や声援は他のお客様の鑑賞の妨げとなる場合がございますので、ご配慮くださいますようお願いいたします。

♪ All seats are reserved. Late admittance will be refused during the live performance. If you enter or reenter just before the concert or between movements, we may escort you to a seat different from the one to which you were originally assigned. ♪ Exiting during the performance will be tolerated. If you do not feel well, please exit or enter as you need. However, please mind the other listeners so that they will be minimally disturbed. ♪ Please refrain from using your cellphone or other electronic devices during performance. ♪ Please cherish the "afterglow" at the end of each piece for a moment before your applause.

出演者プロフィール

指揮とお話 横山 奏

Kanade Yokoyama, conductor & speaker

1984年札幌生まれ。北海道教育大学札幌校で声楽を学び、一念発起し指揮者を目指す。桐朋学園、東京藝術大学大学院音楽研究科修士課程を修了。ダグラス・ボストック、尾高忠明、高関健、中村隆夫、黒岩英臣の各氏に指揮法を師事。2018年、「第18回東京国際音楽コンクール」にて第2位&聴衆賞を受賞。これまでに札幌交響楽団、仙台フィルハーモニー管弦楽団、山形交響楽団、群馬交響楽団、東京都交響楽団、読売日本交響楽団、新日本フィルハーモニー交響楽団、日本フィルハーモニー交響楽団、東京フィルハーモニー交響楽団、東京シティ・フィルハーモニック管弦楽団、東京佼成ウインド・オーケストラ、シエナ・ウインド・オーケストラ、神奈川フィルハーモニー管弦楽団、千葉交響楽団、名古屋フィルハーモニー交響楽団、京都市交響楽団、大阪フィルハーモニー交響楽団、日本センチュリー交響楽団、関西フィルハーモニー管弦楽団、大阪交響楽団、オオサカ・シオン、兵庫芸術文化センター管弦楽団、広島交響楽団、九州交響楽団などと共演を重ねている。2015-2017年、東京シティ・フィルハーモニック管弦楽団指揮研究員を務めた。趣味は登山とBBQ。NHK-FM『石丸謙二郎の山カフェ』にシーズンゲストとして登場、登山とクラシック音楽の関連エピソードを紹介し人気を博している。



ヴァイオリン 辻 彩奈

Ayana Tsuji, violin

1997年岐阜県生まれ。2016年モントリオール国際音楽コンクール第1位。モントリオール響、スイス・ロマンダ管、N響、東京フィル、名古屋フィル、大阪フィルなど多くの国内外の主要オーケストラと共演。2018年「第28回出光音楽賞」、2023年「第24回ホテルオークラ音楽賞」を受賞。小林健次、矢口十詩子、中澤きみ子、小栗まち絵、原田幸一郎、レジス・パスキエの各氏に師事。東京音楽大学卒業。2019年、ジョナサン・ノット指揮／スイス・ロマンダ管とツアーを実施し高い評価を得る。コロナ禍にあって国内公演の代役で幅広く活躍したことは、レパートリーを広く拡充すると共に、経験を深く積むことにつながった。使用楽器は、NPO法人イエローエンジェルより貸与の Joannes Baptista Guadagnini 1748。



©Makoto Kamiya

ゲスト 石丸謙二郎

Kenjiro Ishimaru, guest

1953年生まれ、大分県出身。俳優。つかこうへい舞台『いつも心に太陽を』（1978年）でデビュー。1987年からは、テレビ朝日系『世界の車窓から』のナレーションで、人気を博す。2018年より、NHKラジオ『石丸謙二郎の山カフェ』のパーソナリティー。落ち着いたトーンの声質と渋みのある演技で、テレビ・舞台・映画と幅広く活動。プライベートでは多趣味なアウトドア派。ウインドサーフィン、登山、フリークライミング、ピアノ、釣りを趣味としている。著書『山は登ってみなけりゃ分からない』シリーズ（敬文舎）、画文集『野筆を片手に』（モンベル出版）。



<https://ishimaru-kenjiro.com/>

プログラム・ノート

解説＝柴田克彦

夏気分を盛り立てる、自然にまつわる音楽の数々

今回の「休日の午後のコンサート」のテーマは〈山の思い出〉。山を愛する気鋭指揮者・横山奏が、そういった自然にまつわる楽曲をお届けします。

登場するのは広く知られた名曲ばかりです。「サウンド・オブ・ミュージック」がやや異彩を放っていますが、このミュージカル——特に映画——は、ザルツブルクの自然がアクセントになった内容。中でも「すべての山に登れ」が全体の象徴的な意味を持っており、物語の最後では、ナチスの追手から逃れるため、同曲と共に一家でアルプスの山を越えていきます。

また、進境著しい俊才ヴァイオリニスト、辻彩奈のソロも大注目。『四季』の「夏」では、艶やかで表情豊かな彼女の持ち味が存分に発揮されますし、モンティの「チャールダーシュ」は、彼女が普段のシリアスなリサイタルではほとんど披露していない演目だけに要注目です。

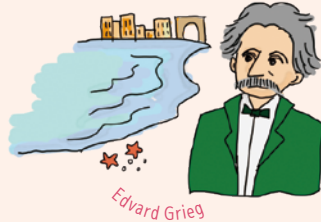
猛暑のおり、今回の“熱くも爽やかな”音楽が一服の清涼剤となるに違いありません。



登山が趣味というマエストロ横山による夏を彩る爽やかな音楽とトークをお楽しみください(写真は2023年10月、立山での登山を楽しむマエストロ)

清々しい「朝」を告げるメロディ

ノルウェーの国民主義音楽を代表する**エドヴァルド・グリーグ**(1843–1907)の**劇付随音楽『ペール・ギント』**より「朝」と「山の魔王の宮殿にて」で幕を開けます。本作は同国の作家イプセンの劇の付随音楽。イプセン本人から音楽を依頼されたグリーグは、30近い楽曲を完成し、1876年に初演されました。物語は、誇大妄想的な伝説の人物ペールが、故郷と恋人を捨てて世界を渡り歩く波瀾万丈の冒険譚です。



「朝」は、フルートのソロに始まる清々しい佳品。ただし北欧ではなく、ペールがたどり着いたアフリカのモロッコ海岸の朝が描かれています。「山の魔王の宮殿にて」は、魔の山で魔王の娘を誘惑したペールが、トロル(妖精、小鬼)に包囲される場面の音楽。奇怪な主題が速度を上げながら反復され、荒々しい高揚を遂げていきます。

ヴァイオリンの音色と技巧を存分に堪能

ここからの2曲はヴァイオリン独奏が主役を務める作品です。まずは、イタリア・バロック音楽の大家**アントニオ・ヴィヴァルディ**(1678–1741)の『**四季**』より「夏」。『四季』は、ヴィヴァルディが残した500を超える協奏曲の中でも特に知られた人気作で、ヴァイオリン協奏曲が4曲続く形になっています。ただし、本来は1725年に出版された『和声と創意への試み』作品8、全12曲中の第1～4曲にあたります。これらは四季の自然や人間の営みを描いた作品。風や動物の鳴き声等々の状況を綴った「ソネット」(定型抒情詩)が添えられ、その内容に則した音楽が展開されます。



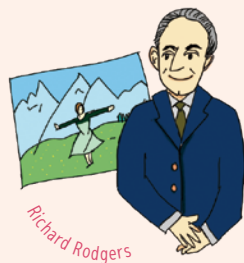
2番目に登場する「夏」は、暑さや嵐を描いたダイナミックで変化の激しい1曲です。第1楽章「けだるい暑さ」(アレグロ・ノン・モルト)は〈太陽が焼け付く厳しい季節に人も羊もぐったり。かっこうが鳴き、北風も吹く〉、第2楽章(アダージョ)は〈羊飼いが体を休めるも、突然雷が鳴り、蝇も群れを成す〉、第3楽章「夏の激しい嵐」(プレスト)は〈雷鳴。ひょうが降り穀物を叩き落とす〉といった情景が描写されます(〈 〉内はソネットの大意)。

おつぎは、イタリアの作曲家**ヴィットーリオ・モンティ**(1868-1922)の「**チャールダーシュ**」。元々はマンドリン用の曲ですが、ヴァイオリンの音色や技巧の発揮に最適な曲調のため、まずロマの楽団の定番となり、やがてクラシックのコンサートでも頻繁に演奏されるようになりました。「チャールダーシュ」とは「酒場風」の意味。居酒屋(チャールダ)における兵士募集の踊りが発展したハンガリーの民俗音楽で、19世紀にはヨーロッパ各地で大流行しました。曲は、哀愁を帯びた遅い部分と爽快な急速部分から成り、後者ではヴァイオリンの見事な速弾きが繰り広げられます。



名作ミュージカルのお馴染みの曲をメドレーで

ここで気分を変えてミュージカルの名作を。『南太平洋』や『王様と私』でも知られるアメリカの作曲家**リチャード・ロジャース**(1902-1979)の「**サウンド・オブ・ミュージック・セレクション**」です。『サウンド・オブ・ミュージック』は、1959年にブロードウェイで初演され、1965年のアメリカ映画で世に広まった傑作ミュージカル。トラップ大佐の7人の子供たちの家庭教師となった修道女見習いのマリアが、歌を教えながら子供たちと打ち解け、大佐との恋にも発展するといった、ナチスの脅威が迫る中での物語です。



劇の最後にアルプスの山を越えて亡命した彼らは、実際に「トラップ・ファミリー合唱団」として活躍したことで知られています。

今回演奏されるのは、アメリカの作曲家ロバート・ラッセル・ベネット(1894-1981)が編んだ管弦楽用のセレクション。「サウンド・オブ・ミュージック(メイン・テーマ)」「恋の行方は」「ひとりぼっちの羊飼い」「私のお気に入り」「もうすぐ17才」「さようなら、ごきげんよう」「ドレミの歌」「エーデルワイス」「普通の夫婦」「誰も止められない」「マリア」「すべての山に登れ」がメドレーで登場します。この内容はオリジナルのミュージカルに基づいており、お馴染みの歌のほか、映画には登場しない楽曲も含まれています。

はげ山での精霊や魔女たちによる狂乱の饗宴

再びクラシックの有名曲が登場。ロシア国民楽派「五人組」の一人 **モデスト・ムソルグスキー**(1839-1881)の**交響詩『はげ山の一夜』**です。この曲、最初は1860年頃に戯曲『魔女』の付随音楽として発想され、1867年に「はげ山のヨハネ祭の夜」として一応の



完成をみますが、これはお蔵入り。次いでムソルグスキーは、歌劇『ソロチンツィの定期市』(未完)に、合唱付きの楽曲として転用を試みます。そして彼の死後、五人組の仲間リムスキー＝コルサコフが、最後の形のピアノ譜に基づいて管弦楽版を完成し、1886年、現在一般的な『はげ山の一夜』として発表されました。ただし最近では、ムソルグスキーのオリジナルの形での演奏も増えてきています。

曲は、「聖ヨハネ祭の夜には、悪魔たちがはげ山で酒宴を開く」との伝説に基づく情景を描いたもの。総譜には以下の説明が記されています。「地下から響く奇怪な声。闇の精、続いて闇の神チェルノボーグが出現。闇の神への賛美と黒ミサ、魔女たちの饗宴。狂乱の頂点で教会の鐘が鳴り、闇の精たちは消え去る。夜明け」。曲は不気味に始まり、金管のファンファーレを伴うクライマックスの後、静かに終わります。

美しいウィーンの緑を描いたワルツ

おしまい、ウィーンの“ワルツ王”ヨハン・シュトラウスII世(1825-1899)のワルツ『ウィーンの森の物語』。『美しく青きドナウ』と並ぶ彼の大規模ワルツの代表作であるこの曲は、1868年に初演され、5回もアンコールされたといえます。ただし曲の背景は今ひとつ不明瞭で、「国

外への演奏旅行から半年ぶりに戻ったヨハンが、いつにも増して高まるウィーンへの愛情を込めて作曲した」とされる一方、「ウィーン周辺の小さな開拓地の人々が苦しみ様子が、その土地の音楽の引用によって表わされている」と記した資料もあります。特徴は、緻密で長い序奏部。民俗楽器ツィターのソロ(通常は弦楽器のアンサンブルで代用されます)で知られる部分です。それに5つのワルツが続き、序奏を回想する形のコーダで締めくくられます。



しばた・かつひこ(音楽ライター)／音楽マネージメント勤務を経て、フリーランスの音楽ライター、評論家、編集者となる。雑誌、公演プログラム、Web、宣伝媒体、CDブックレット等への寄稿、プログラム等の編集業務のほか、一般向けの講演や講座も行うなど、幅広く活動中。著書に「山本直純と小澤征爾」(朝日新書)、「吹奏楽編曲されているクラシック名曲集」(音楽之友社)。